

【司会】 それでは続きまして、まとめと闘いに向けた要請ということで、ハンセン病違憲国賠訴訟全国弁護士連絡会の徳田弁護士から、ご発言をお願いいたします。

【徳田】 改めまして、皆さん、こんばんは。私ごとですけれど、私は弁護士で星塚敬愛園を担当しております、私のお父さんやお姉さんたちがすばらしい話をした後で、こういう場でお話しをするのは大変難しいんですけれど、今日は、北は北海道から南は沖縄まで、こんなにたくさんの方々にご参加いただきまして、ほんとうにありがとうございます。先ほど、全療協の神さんとちょっとお話ししたんですけど、神さんは、450人を超える方が参加してくださったという、そのこと自体で、私たちがどれほど大きな励ましをもらったかわからないということを、先ほど感激しながら話していただきました。車椅子の方をはじめ、たくさんのご不自由をお持ちの方が参加しておられますのに、ほんとうに主催者側の1人としておわびしなければいけないのは、この科学技術館のサイエンスホールと聞いてたものですから、まさか、こんなにバリアーばかりのところだとは思いません、大変ご不自由をおかけしましたことをおわびするとともに、ほんとうにご不自由な方々が、このハンセン病の問題をご自分の問題と受けとめていただいて、参加していただいていることに、私は何とも言えない感動をいただいております。

先ほど来、今ハンセン病療養所で何が起きているのかということについて、具体的に一つ一つ、その状況を告発するお話がありました。皆様はどんな思いで一つ一つの話をお聞きになられましたでしょうか。94歳の民市さんや、シゲさん、86歳の、あ、11歳でした。ごめんなさい。正子さんがハンストをやり抜くという決意を表明されたことをどんなふうにお聞きになられましたでしょうか。

私は3つの感情が同時に渦巻いています。おかしな表現かもしれませんが、今一番強く感じているのは恥ずかしいという気持ちです。私たちの国はこれほどの過ちを犯し続け、裁判所にその過ちを指弾され、みずからこの過ちを償うために、療養所におられる方々にせめて生きててよかったと思われるような余生を約束しました。その私たちの国は、90歳を超えた方々がハンストをするという決意をしない限り、状況を少しも変えようとなし、そんな恥ずかしい政府を私たちは持っているのかと。同時に、私は、自分自身にも恥ずかしいという思いを抱かざるを得ませんでした。私たちはハンセン病療養所において毎日毎日ご不自由している方々のことを、暑い日も寒い日も1週間に3回しかお風呂に入れず、自分たちが生きてきたことの意味がどうなのかと問い返さざるを得ないような生活を送っている人たちがいるということ、90年近い隔離生活を許してしまった責任の一端は

私たち社会の一人一人の側にもあるということ、そういったことを日々の暮らしの中でどれだけ省み続けてきたんだらうか。私たちがそうした思いを怠ってきたがために、90歳を超えてハンストをするという決意をせざるを得ないという状況ができてしまったのではないか、そんなふうに思います。

そのことは同時に、約束をほごにし、ハンセン病問題基本法で医師、看護師、介護員の確保をすると約束したはずの厚生労働省や政府が、今日までその約束をきちんと果たしていないということに対して、ほんとうに全身から怒りがこみ上げてきます。そうした中で、ハンストまでしてでも、自分たちの残された人生、命をかけてでも尊厳を守りたい、自分たちが生きてきたということ、この体をもって刻み込んでいきたいというふうに願っているハンセン病療養所におられる皆様方に、私は心からの敬意を表したいと思いますし、また今日の、お手元にありますメッセージ集をごらんいただきたいと思いますが、これだけ多くの人たちがハンセン病の問題を自分の問題として、自分はいかに生きようとしているのかという問題として考えて、今日ここに結集していただいていることに、ほんとうに心から敬意と、そしてお礼を申し上げたいと思います。

情勢は予断を許しません。国家公務員の定数を削減するという閣議決定の壁の厚さというのは、私たちの想像を超えるものです。この壁を突破していくのに時間がありません。これから5年、10年かけて闘うというようなそういう性質の闘いではありません。12月までの来年度予算の編成、その骨格が固まるまでの間に、ハンセン病療養所における職員の減少をとめる、増員化へと転換させる、700名を超える賃金職員の方々を正職員にしていくというこの道筋ができない限り、この闘いは意味をなしません。わずか2カ月足らずの間にこうした厚い壁を突破していくためにどうすればいいかということを考え抜いた上で、ハンストを含む実力行使をする以外ないと、全療協は決意をされたわけです。

私たちはこれを受けとめて、何をしなければいけないのか、それは私がこんな高いところから偉そうに申し上げるまでもないことだと。ハンストをさせてはなりません。ハンストなくして解決するというのを、私たちの力で、そういう状況をつくっていかねばなりません。そのためには政府に対して、国会に対して、どれほど多くの国民の皆さんたちがハンストを決意した全療協の闘いを支持しているのか、この思いを受けとめなければ、そうでなくても、もう最低限度になってる内閣は、文字どおり、野たれ死にで死んでしまうんだという形で、私たちの意思を、全療協の闘いを支持するという私たちの意思を政府に届け続けなければいけないと思います。

その上で、ハンストをやらせてはいけない、けども、やらなければ突破できないほどの厚い壁であるということ、私たちは忘れてはなりません。ハンストを初めとする実力闘争をやる時期は、おそらく12月の初めになると思います。12月の初め、実力行使に入るときには、厚生労働省前の座り込みと、各療養所において座り込みや、状況に応じたハンストが行われることとなります。

どうか、皆さん、お願いします。82歳を超えられた方々が、この寒い時期に座り込むこと、あるいはハンストをするということ、文字どおり命を削るという闘いであるということ、理解していただいて、厚労省前で、それから各療養所の所在地で、入所者の方々の闘いを支援する輪を大きく広くつくっていただきたい。そのための準備を今日から始めていただきたいと、そんなふうに思っています。

偉そうなことを高いところから申し上げましたけれど、もう一度、申し上げさせてください。先ほどお話があったように、70年間を超えて、療養所の中で隔離された生活を過ごしておられます。せめて、生きてきてよかった、そう思えるような、そう思っていたいただけるような状況をつくっていくということのために、私たちは自分が持っている、あらゆる限りの力を尽くして、ともに闘っていきたいと思います。どうかよろしくお願いします。本日はありがとうございました。(拍手)

【司会】 徳田先生、ありがとうございます。ほんとうに、私たちの生きざまそのものが問われる闘いでもあると思います。入所者の皆さんの命がけの闘いに、しっかりと寄り添って支援をして、政府を包囲して、闘い抜いてまいりましょう。